

書評

神尾陽子 編

成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル

内海 健

編者の神尾陽子さんは、私にとって自閉症の師匠である。

精神科の一般外来で「広汎性発達障害」という診断名を意識するようになったのは、ほんの十年ほど前である。それが見る間に主要な関心事となった。いわゆる「アスペルガー障害」はそのサブカテゴリーである。また発達障害の中には ADHD や学習障害も含まれる。いささか錯綜した分類であるが、最近では自閉症をコアとしたスペクトラムを「自閉症スペクトラム (ASD)」とすることによって、すっきりと整理された観がある。

多くの精神科医がこの新しい病態の前に戸惑いを覚えた。筆者も例外ではない。その戸惑いが、「発達障害」、あるいは「アスペルガー」という用語によって一挙に解消されたとき、それこそ腰を抜かすような感覚にみまわれた。そして、今後の精神科臨床は、こうした事例を理解できなければ立ち行かないことを痛感させられたのである。

しかし困ったことに、私の周辺には専門家がいなかった。それゆえ、セカンドオピニオンを求めて小児精神科医にたびたび紹介を試みたのだが、そのたびごとに期待は裏切られた。たとえば「親が来られないなら診断できない」と門前払いをされたこともある。確かに発達歴をとらなければ、発達障害とはいえないだろう。しかし成人例の場合、親が同伴するわけにもいかない事情がしばしばある。専門家を標榜しているのなら、親からの情報がなくとも見立てるくらいの力量がないものだろうか。整然と問診や検査ができる条件が整っているなら、門外漢でも診断できるだろう。

そんな中で神尾さんだけは、私の臨床的ニーズに応えてくれた。成人期に事例化する ASD の場合、必ずしも自閉症性の障害が軽いからといって、本人の抱える問題が軽いわけではない。軽微な事例のほ

うがかえって適応が難しく、苦悩が深いことが多い。専門家の場合、小児のコアの事例に慣れ親しんでおり、成人例はかえって盲点となることがあるようである。

また成人期の ASD で問題となるのは、女性例である。しばしば見逃されていたり、境界性パーソナリティ障害などと誤診されていたりする。かつては自閉症といえば男性が定番であった。いまだに年配の専門家の中には、男女比が 10:1 であるとか、「女性はわかりませんな」などと言って平然としている方もいる。それに対して、神尾さんの女性例に対する感覚は群を抜いている。

神尾さんはわが国を代表する自閉症の研究者であり、エヴィデンスというものを誠実に遵守するスタイルを貫いている。しかしエヴィデンスがない成人例に対しては、「ないなりにやらなければならない」という臨床家魂を持って当たっている。本書の冒頭近くで、『(ASD 成人に対する)「専門医」はどこにも存在しないのである』と喝破されているのは実に痛快である。

さらに付け加えるなら、自閉症にはまだ生物学的マーカーが存在しない。それゆえ、我々は五感と想像力を駆使して立ち向かうよりないのである。本書はそのための格好の指針となるものであり、一読した後には、臨床的想像力を存分に羽ばたかせる舞台が与えられるだろう。現場の臨床家にぜひとも読んでもらいたい。

(東京藝大保健管理センター准教授)

●B5 208 頁 2012 定価 3,990 円(本体 3,800 円+税 5%) 医学書院刊